

2010.9.25

場所: 中央大学

ヤヌシュ・コルチャックの子どもの権利思想

—子どもの3つの基本的権利—

埼玉大学 小田倉 泉

1 ヤヌシュ・コルチャックの生涯

ヤヌシュ・コルチャックの生涯は、幼年期～学生時代(1878/79－1903)、医師時代(1905－1912)、教育実践の開始と全盛期(1912－1932)、危機と絶滅の時代(1932－1942)に分けられる¹。彼はギムナジウム時代に「子どもの問題」と出会い、大学入学時に既にペスタロッチーの教育学についてより深く学ぶためにスイスを訪問している。医学部を卒業し小児科医となるが、これによって医学と教育学の結び付いた独自の『『道具』と方法』を得ることとなる²。1912年、小児科医の職を辞し、ユダヤ人孤児のための孤児院「ドム・シェロット(孤児たちの家)(Dom Sierot)」の監督者となり、1919年には、「ナシ・ドム(私たちの家)(Nasz Dom)」と名づけられたポーランド人の孤児のための孤児院を設立する。1918年から1931年はコルチャックの「活動と創造性の最盛期」と言われ、代表的著作の殆どがこの間発表された他、政府主催の教育講演等での活動もこの期間活発に行っている。

1940年11月「孤児たちの家」はワルシャワ・ゲットーに強制移住させられ、1942年8月6日、コルチャックはじめ、200人の子どもと教師たちは、トレ布林カへと移送された。その後、コルチャックの名の各地への伝播と受容の第1段階においては、その生涯と彼らの最期が注目されていくこととなった。

2 子どもの3つの基本的権利

コルチャックは「もっとも重要な子育て・教育論」³といわれる『子どもをいかに愛するか』(1918)の「家庭の中の子ども」編に、「3つの基本的な」権利を挙げている。

「お聞きください！今われわれは合意に達するかもしれないし、永遠に意見を違えるかもしれない。…

私は、子どもたちの権利のマグナカルタを、声を大にして求める。もっと多くのものがあるであろうが、わたしは3つの基本的なものを見出した。

1. 子どもの死に対する権利
2. 子どもの今日という日に対する権利
3. 子どもがあるがままでいる権利」⁴

(1) 「子どもの死に対する権利」

この権利には、主に3つの解釈が見られる。

1つ目は、文字通り現実的な子どもの「死」を受容するという解釈である。

「母親の子どもへの情熱的で賢明な、そして公正な愛情は、子どもの早すぎる死に対する権利を彼に与えるべきである。その権利は、子どもの人生のサイクルが、地球が太陽の周りを60周するとき終わるのではなく、たった1度か3度の春を見て終わりを迎えるという、人生の最期に対する権利である。

『神は与え、神はお取りになる。』…すべての種子が穀物の穂を実らせるわけではないし、すべてのひよこが生きるのにふさわしいように生まれてくるのではない。…。」⁵

「死がわれわれの元から子どもを奪い去るという恐怖心から、われわれは子どもを生から遠ざけている。彼が死なないように望みながら、われわれは、彼が生きないようにしているのである。」⁶

リフトンは、コルチャックが基本的権利の第1にこの権利を置いたことには、彼の「子どもがいかに威厳

を持ち、成熟し、懸命に死と直面するかを明らかに示し」⁷た病院での経験が大きく影響しているとしている。塚本もまた、この権利には子どもの早すぎる死をも受け入れる覚悟が必要であるという意味も存在するとして、それは子どもに与えられた短い期間内での成長、成熟が重要であるからだと述べている。

2 つ目の解釈は、危機への恐れを取り除くことによって子どもに経験の機会を与え、更なる危機を乗り越える力を養うことを保障するための、いわば逆説的な表現として捉えるものである。

「かわいそうに、何をしたの？ 痛いのか？ …」

ドア—指をはさむかもしれない、窓—身を乗り出しすぎて、そこから落ちるかもしれない、プラムは—喉を詰まらせるかもしれない、椅子—ひっくり返って怪我をするかもしれない、ナイフ—指を切るかもしれない、小枝—目を突き刺すかもしれない、……。

“手を折るわよ、車に轢かれるわよ、犬に噛まれるわよ。プラムを食べてはいけぬ、生水を飲んではいけぬ、はだしで走ってはいけぬ、暑いんだから無茶をしてはいけぬ、コートのボタンをかけなさい、首にスカーフを巻きなさい。ほら見なさい、聞いていないからよ。…

しかし、子どもがそれらの全てをまともに受け取って、1ポンドのプラムをこっそり食べたり、大人の注意を無視したり、暗い隅でマッチを擦ったりすることをこらえているならば、;もし、……どんなことでも試してみることを諦め、どんな方法でも意志力をためすことをあきらめていたとしたら、ある日痛みや燃える感じ、心の深いところでの苦痛がやってきた時、彼はどうするのか？ …」⁸

ヴァイマン⁹は、コルチャックが過保護への警告を与えるために、このような「刺激的」な権利を定式化したと述べている。バイナー¹⁰もまた、この権利を「自立と自己決定の促進」を促進するものとして、根本的なリスクを背負っている経験の余地を残しておくこと、さらには、過ちや失敗に対する権利を承認することであるとしている。子どもが将来必ず出会うことになる様々な、精神的、肉体的衝撃を受け止め、それを超えていくためには、小さな危機や衝撃の経験が必要であるという解釈である。

3 つ目の解釈は、自分自身の生命に対する権利、自由への権利を意味しているとする解釈である。ベルディン¹¹は、この権利を過保護によって子どもの身体的精神的自由が奪われていることへの指摘、と解釈している。更にコーエンは¹²、コルチャックがこの権利において理論的表現として「死」を用いることによって、自由と権利をめぐる主張を述べてしている、と述べる。コーエンは、コルチャックが、人間から死ぬ権利を取り上げれば、その生命を制御する力を取り上げてしまうことになる、と考えていたことを挙げ、理論的選択としてより多くの潜在的な権利、自由の実現を意図していたのではないかという解釈を行っている。

(2)「子どもの今日という日に対する権利」

「今という瞬間を、今日という日を尊重しなさい。今日という日を自覚的に、責任を負って生きることをさせないで、どうして明日という日を生きることができるのか？ …それぞれの瞬間を尊重しなさい。それぞれの時間は過ぎ去ってしまえば、2度と戻ってこないのだから。」¹³

「何が起るかという受動的で退廃した期待の中で自らを教育することで、われわれは絶え間なく魅力的な未来へと急いでいるのである。怠惰にも、われわれは、先にあるものをふさわしく受け入れる準備をするためといって、今日という日の美しさを探すことを拒んでいる。明日はそれ自体が、明日の感動を運んでくるだろう。…どういう訳で、子どもの 今日 は、彼の明日 に比べて、より悪く価値の低いものなのか。…

ついに明日がやってきたとき、われわれは次の明日を待ち始める。」¹⁴

「明日のために、今日の子どもを喜ばせたり、悲しませたり、驚かせたり、怒らせたり、夢中にしたりすることが軽視されているのである。子どもが理解してもいなければ、理解する必要もない明日のために、子どもの人生の何年かが奪われているのである。

…子どもは考える。

『ぼくは何者でもない。おとなだけが何・者・か・なのだから。ぼくはちょっとだけ今は大きくなった。でもまだ、何・者・でもない。あとどのくらい待てばいいのだろう。…』¹⁵

「われわれは彼らに明日の人間という重荷を負わせている一方で、今日を生きる人間の権利を与えていない。」¹⁶
ベルディンは、この権利を、子どもが生きることを切望している、という事実の「コルチャック的翻訳」であると表現する¹⁷。この権利が意味することは、第1には子ども時代の絶対的な価値の強調である。コーエンは、コルチャックが子ども時代を、それ自体人生の本質的で完全な一部であり、他の段階と比較し得ない絶対的価値をもつものであることを認識していたことを述べ、バイナーは、おとな時代の価値と子ども時代の価値は同等であること、子ども時代特有の「今」、その「今」における欲求や要望などの尊重が、この権利にあるとしている。

第2には、子ども時代の経験の尊重である。コルチャックは、子どもとしての子どもの経験を教育の焦点としたとコーエンは述べるが、子ども時代を喪失することなく、この時期に相応しい子どもらしい経験の保障への要求がこの権利にあると言える。

第3には、今存在する子どもを尊重することの強調である。おとなが子どもを「成長しつつあるもの」としてのみ見、常に明日の子どものために対処しているのは、つまり現実には存在しないものとして子どもを見ていることである¹⁸、ということへの指摘である。

(3)「子どものあるがままである権利」

コルチャックは、子どもの現在ある状態を、本に書かれている規準に従って評価し優劣を付けるのではなく、今の「あるがまま」の子どもを受け入れるべきことを訴えている。子どもはおとなの理想像の枠の中で評価されるような対象ではなく、なにものにもとらわれない子ども自身の存在の価値があり、その固有性が成長するための教育とは、矯正や圧力ではなく、成長に必要な諸条件を与えることである。

「子どもがあるがままである権利」

…われわれは、子どもたちがわれわれ以上のものになることを望んでいる。われわれは将来の完璧な人間を夢見ている。…

われわれは悪意のない過ちを認めようとしなさい。

子どもは知らない、良く聞いていなかったし、理解していない、それか何か聞き間違えたから、間違ってしまう、うまくいかないし、できない、これがすべて彼の罪となる。」¹⁹

「子どもの無知を尊重しなさい。 …

知るといふ労働を尊重しなさい。

失敗と涙を尊重しなさい。」²⁰

「あるがままである」とはレヴィン²¹によれば、子どもが自分自身であるということとは、子どもの今ある状態、自分はこうなりたいと望んでいる姿、あるいは自分はそうなれる、といった子どもの中に内包されたすべてのことを含んだ「自分自身」である。レヴィンは、この第3の権利を、子どものおとなとの平等の権利を保障するためのものであるとしている。コルチャックの要求する平等の権利とは、子どもの標準的な発達を保障する物質的な必要条件や適切な保護だけでなく、子どもは人間の萌芽などではなくすでに人間であるという事実を理解し認識することである、ということである。

バイナーは、レヴィンと同様に、「子どもはこれから人間になるのではない、彼らはすでに人間なのだ。」という主張がこの権利にあるとしている。「あるがままである」とことは、子どもの個性とアイデンティティへの励まし、過度に高い子ども時代への理想を取り払うこと、平凡であることへの子どもの権利、自由な成長の機会を含むものとしている。

3 まとめ

3つの基本的権利をコルチャックが提案した当時のポーランドと、現代日本の状況とは、経済、社会、教育等、いずれにおいても正反対の状況であるが、これらの権利を通して今日の状況を見渡すと、親のエゴから生じる過保護、将来のための超早期教育、子どもの居場所の問題など、今日の子どもたちを取り巻く様々な問題が浮かび上がってくる。ベルディンは、コルチャックの子どもの権利思想の今日的意義とは、今日の科学的合理性の侵略に対する対抗力であるという。ベルディンは、とりわけ保育、初等教育のカリキュラムが盲目的な将来への執着に基づいていることを指摘し、コルチャックの権利論がこの状況への批判力となると語っている。

コルチャックの子どもの権利論を実践するということについては、ベルディンは、教師の精神に確かな態度を要求するというだけでなく、組織化される必要があると述べ、欧州議会人権委員会議長トーマス・ハンマーベルク²²は、2007年、2009年の講演の中でコルチャックのメッセージとは、「子どもの権利と民主主義は、大人の態度が変わることを求めている。」「手段や方法の問題だけではなく、・・・助けの手を差し伸べる態度と意思の問題」であると語っている。

コルチャックの権利思想を研究していく中で、その実施は常に課題であるが、今日の親たちへのメッセージとしてどのように伝達していくのかを今後の課題としていきたい。

¹ Maria Falkowska CALENDER OF LIFE AND WORK OF JANUSZ KORCZAK *Dialogue and Universalism* No.9-10 Warsaw University, Warsaw, 1997 p.184

² Adir Cohen The Gate of Light Janusz Korczak the Educator, and Writer Who Overcome the Holocaust Associated University Presses 1994.

³ 塚本智宏 「コルチャック 子どもの権利の尊重」 子どもの未来社 2004 p.59

⁴ Janusz Korczak, “Jak kochać dziecko” *Janusz Korczak PISMA WYBRANE I* Nasza Księgarnia Warszawa 1984 p.124

⁵ Janusz Korczak “How to love a child” *Selected works of Janusz Korczak* ed.Martin Wolins trans.Jerzy Bachrach Springfield, Virginia, 1967 p.129

Korczak, op.sit. “Jak kochać dziecko” pp.124-125

⁶ Korczak, op.cit., “How to love a child” p.132

⁷ Janusz Korczak “The Application” *Selected works of Janusz Korczak* ed.Martin Wolins trans.Jerzy Bachrach Springfield, Virginia, 1967 p.LII

⁸ Korczak, op.cit., “How to love a child” pp.131-132

⁹ Philip E.Veerman *The Rights of the Child and the Changing Image of Childhood* MARTINUS NIJHOFF PUBLISHERS 1992 p.95-96

¹⁰ Friedhelm Beiner Wer kann Erziehen sein? *Einführung in die Korczak-Pädagogik* / herausgegeben von Lothar Kunz. Weinheim ; Basel : Beltz Verlag, 1994 石川道夫先生からの資料提供に拠る。

¹¹ Joop.Berding, Inge Smit en Inge van Rijn JANUSZ KORCZAK FOR WORKERS IN CHILDCARE AND AFTER-SCHOOL CARE Published by Janusz Korczak Stichting Amsterdam May 2010

¹² Cohen, op.cit.,

¹³ Ibid. p.178

¹⁴ Janusz Korczak, *WIE MAN EIN KIND LEIBEN SOLL* Vandenneck&Ruprecht, Göttingen 1992 p.44

Korczak, op.cit., “How to love a child” p.133

¹⁵ Ibid. p.134

¹⁶ Ibid. p.165

¹⁷ Joop.Berding “Meaningful Encounter and Creative Dialogue:The Pedagogy of Janusz Korczak” *Journal of Thought*, Winter 1995

¹⁸ 塚本、前掲書

¹⁹ Janusz Korczak “When I am little again / *The Child’s Right To Respect*”(1929) translated from the Polish with introduction by E.P.Kulawiec University Press of America 1992 p.181

Janusz Korczak *Prawo dziecka do szacunku* Wydawnictwo Akademickie “Żak” 2002 p.176

²⁰ Korczak op.sit. *Prawo dziecka do szacunku* pp.172-173

²¹ Aleksander Lewin “Tracing the Pedagogic Thought of Janusz Korczak” *Dialogue and Universalism* No.9-10 Warsaw

University, Warsaw, 1997 pp.119-125

²² Thomas Hammarberg Hammarberg “Listen seriously to the views of children” 2007.11.19

http://www.coe.int/t/commissioner/Viewpoints/071119_en.asp

Thomas Hammarberg “Children’s rights must be protected during the economic crisis” Annual MSU
Conference ,Moscow 24 April, 2009

<https://wcd.coe.int/ViewDoc.jsp?id=1436385&Site=CommDH&BackColorInternet=FEC65B&BackColorIntranet=FEC65B&BackColorLogged=FFC679>